

が、何人かの生徒がよく理解できていないようです。補助に来ていた別の教師の方から、前方の席の生徒を指導願いますと要請され、教室内を移動し二、三人に説明。集中力を高めるには、読み上げ算のように耳が頼りでは見ができないのが効果的ではないかと感じました。澤田先生が授業の終わりに姿勢を正し目を閉じて「そろばん式暗算」を唱えるのがよくわかりました。私の教室では小学校と違い「随時制」のため一斉に「読み上げ暗算」等を探り入れておりません。これからの「新入生」に対して、少しずつ採り入れようとの意を強く持ちました。

一日四時間の授業を受け持ち、三日間ボランティア指導に通われる二人の先生、本当にありがとうございます。また、珠算指導に深いご理解を頂きました船越小の校長先生ならびに教職員のみなさん、ありがとうございました。

## 夏の句

只今と 声かけ覗く 冷蔵庫

帆を巻きし 漁夫の二の腕 炎天下

公園の ベンチで眠る 夏帽子

庸泰

梅ちゃん先生とそろばん、  
そして昭和の音

中遠地区 尾崎 潔

NHKで、平成二十四年の春から始まった朝の連続テレビ小説「梅ちゃん先生」。その中でそろばんが使われたこと。そしてそれに関して全国珠算新聞第五百九十三号に太田敏幸先生の予告記事が載っていたことを覚えておられるだろうか。

朝の連ドラでそろばんが使われることはよくある。最近でもカーネーション、おひさまで使われているが、そこでのそろばんは軽い小道具程度で、それを使つてのメインの計算は、なかなか出てこない。梅ちゃんではどのように使われているだろうか。

## 『ドラマとそろばん』

梅ちゃん先生。舞台は東京蒲田。終戦直後の昭和を背景にして、高度成長期の日本の発展とともに、主人公の下村梅子（堀北真希）が町医者となつていく物語。しかし、このお話、梅子が医者になるまでは、コメディである。コメディの主役は、梅子か、その父であり医者である建造（高橋克実）。二人とも医学の道を志す人にしては、その勘違いと思

「梅子、患者を不治の病と思ひこむ事件」、「建造、やみ米は食べないと家庭内ストライキ事件」など、事件が続いていく。

まわりの人たちもそれに巻き込まれていく。「どうしよう」が口癖の梅子が、その「どうしよう」を口にするたび、周りの人もそれを放っておけなくなる。しかし週の終わりに、その勘違いの出来事は、無事解決となり、めでたしめでたしとなる。そのことで梅子たちが一つ成長するという繰り返しのドラマ。一週間で、一つの小さな物語になつていて、そのエピソードが物語全体の伏線にもなっている。梅子の周りは善意の人ばかりなので、事件が起こっても安心して見ていられる喜劇。それが「梅ちゃん先生」である。

だが、そろばんをするのは梅子ではない。いつも騒ぎに巻き込まれてしまうが、頭のいいしつかりものの梅子の姉の松子（ミムラ）だ。

松子には軍医である婚約者がいた。名前にコンプレックスを持つ梅子に「梅の花は春一番、桜より先に咲いてみんなに希望を与える花」と言ってくれた人だ。その人は戦争で命を亡くし、でも松子はその姿を忘れないでいる。その姿や志を梅子に重ねたりもする。その面影に縛られ、

一步、前に行けない。ある意味、梅子よりも家族に守られていて、その居心地のよさに家事手伝いを続けている。それが松子だ。しかし、ある事をきっかけに、社会に出て行くことを決意する。

物語の中で、松子は商社を受けるための資格はタイプと簿記と言われる。そこで簿記の検定を受けるために、医学生である梅子と机を並べて、松子は勉強を始める。そして、そこに登場するのが「そろばん」である。

「梅ちゃん先生」でそろばんが登場するシーンは限られている。しかし、すべて松子の上達がよく分かるカットが使われている。最初は簿記の計算の時のそろばんの使われ方だ（第十六話）。松子がそろばんの珠を弾くときのペンの持ち方が妙である。ペンを持つて書く角度をそのままにして、すこしだけペンを中指側にずらして、親指と人差し指で珠を弾く。そろばん素人である。弾き辛そうなのが一目で分かる。それが無事商社に就職してからは、ペンを手のひらで握り、親指と人差し指で美しく正確に珠を弾く（第二十話）。さらにも年数を重ねるとそろばんの姿にさえも年季が入る。使い込んでいる（第五十三話）。